

Turning Point

すすむ 生きる わたし

③

「女性が選挙にバンバン出たらいいね！」

世田谷区議会議員 中山 みずほ さん



今年4月、新人候補にして7590票を獲得し、75人中5位で世田谷区議に当選した中山みずほさん。組織の後ろ盾のない中、先の見えない選挙戦だった。

しかし、「こんな選挙は初めて」「組織や動員では作り出せない」「フレンドリーでピュアで、とても柔らかい雰囲気」というのは手伝った女性の感想だ。

最初から応援していた女性2人がキーパーソン。一年半前から頻繁にやり取りをし、様々なことを決めた。「頑張りなあなたを独りにしない」と

いうコピーも、夜通し議論。中山さんは「そもそも頑張れない人もいるのでは…」と気になったが、その言葉に引き寄せられるように、「話を聞いてほしい」という電話やメールが相次いでいる。

選対事務局長をはじめ、後援会長もすべて女性。大事な戦略はすべて女性たちと決めて、通常の選挙戦で当たり前のことをいちいち見直した。この感性が決め手だった。選挙カーの運転もすべて女性。子育て中の女性が多くフルでは難いため、1日ずつ交代でお願いした。

*

今回、選挙の流れを変える転機を2度経験した。

一つ目は、自分の生い立ちから今に至るまでを伝えたことだ。「世田谷マダム」の暇つぶし立候補、と勘違いされたこともあって、そうじゃないと伝えなかった。

抱え、ハタチで一人暮らしを始めるまで、1枚の布団で寝たことがなかった子ども時代。父親の家出、家の借金返済、国立大学受験に失敗し働き始めたこと、転職後の広告代理店勤務での努力、32歳の社会人大学入学、結婚、出産後の保育園問題、そして3・11。

仕事を辞め、放射能から子どもたちを守る「子ども全国ネット」の代表理事、「世田谷子どもを守る会」の事務局として奔走した。

また、世田谷区の子育て環境をより良くするために、世田谷区の子育て・保育・幼児教育に関わる委員も複数務めた。地域での活動を始めたことで「私に何ができるのだろう」と、改めて考えるようになった。

当初は、誰にも言ったことがない生い立ちを赤裸々に伝えることに躊躇した。それを吹き飛ばすように「中山さんの生い立ちを知って、燃えましたー」と、たくさんの方が声をかけてくれた。

2度目の転機は、大学入試の女性差別問題が発覚した頃だ。地域を回る中で、娘を持つ母親たちの憤りの声を数多く聞いた。女性差別に怒る女性の声はまだまだ政治に届いていないと実感し、その後は「女性の声を届ける」という訴えを意識的に増やした。すると、駅でのチラシ配りでも、女性と目があう回数が増えた。「これからは女だよ！」と握手を求めてきた男性もいた。

「女性が選挙にバンバン出たらいいね」と中山さんは言う。「やっぱり女性の声よ」と、義理の親の介護で経験した辛さを泣きながら話してくれた高齢の女性が忘れられない。「我が家は代々自民党、私も黨員だけど、今回はあなたに入れた」とその女性は明かした。

「湧き上がってきた社会や政治に対する不安や怒り、その思いを一手に引き受けてくれたみずほさんだから、みんな純粹な気持ちで労力を厭わず応援している」と手伝った女性は語る。「4年しか任期がないから、頑張らなくちゃ」。中山さんは、決意を新たにしている。

経済的な問題を常に

2度目の転機は、大学入試

(吉田千亜)